

湘南里川づくり地域共生プロジェクト：2019 年度概要

～流域活動団体連携コース：金目川水系の今後～

藤野裕弘*・日比慶久**

1. はじめに

人類社会の持続的存続には、環境問題を広い視野から考え、問題の解決に向けて行動できる人材の育成が必要である。そのような人材育成には、人文・社会・自然科学の垣根を越えた学際的で実践的な教育プログラムの構築が極めて重要となる。その中でも実践的な環境教育への期待は大きく、2000 年には国連における日本主導の「持続可能な開発のための教育の 10 年」がスタートし¹⁾、日本では環境教育の推進を目的とした「環境保全活動・環境教育推進法」が 2003 年に成立した²⁾。

東海大学では、環境分野における学際的な人材の育成とその成果を、地域社会に還元することを目的の一つとした環境憲章を 1997 年に発表している³⁾。また、教養学部では、広い視野を持った人材育成を目的に、学部共通科目を段階的に履修させ、実践系科目に結び付ける共通領域を構築している。さらに、教養学部人間環境学科では、自然科学系と人文・社会科学系カリキュラムを融合させた人間環境領域（総合環境科学系）を構築し、人間環境に関わる様々な問題を、人文・社会・自然科学の枠にとらわれない広い視野から考え、問題解決に向けて行動できる人材の育成を目的に、実践的な環境教育プログラムを実施している^{4)、5)}。この特徴的な環境教育プログラムは、2011 年度の日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会 21 期提言の中で引用されるに至っている⁶⁾。こうした背景のもと、我々は、様々な体験型環境教育プログラムを実施してきた⁷⁻⁵¹⁾。この湘南里川づくり地域共生プロジェクトは、2012 年度から実施している⁵²⁻⁶⁰⁾。

今回は、教養学部共通実践科目である人間学 2「湘南里川づくり地域共生プロジェクト：流域活動団体連携コース」の 2019 年度実施概要について報告する。

2. 目的及び実施概要と結果

「湘南里川づくり」は、湘南地域のふるさとの川である金目川水系流域の自然や文化、くらしを地域の貴重な財産として次世代を担う子どもたちに引き継いでいくために、市民（湘南里川見守り隊）と行政の協働により河川等の保全・活用に取り組む活動のことである。本プロジェクトは、流域団体の活動をネットワーク化し、「湘南里川づくり」を流域全体に広めるこの活動と連携する。学生は、それら流域団体の連携を図る目的で実施する「湘南里川づくりフォーラム」に企画段階から参加し、実際にフォーラムの運営に携わる。

具体的には、履修学生が、「湘南里川フォーラム 2020」の企画・運営に参加する。学生は、湘南里川づくりみんなの会のフォーラム担当幹事と複数回の企画打合せを行い、表 1 のプログラム概要を取りまとめた。その後、担当割に従い準備を進め、2 月 2 日（日）にフォーラムを実施した。参考として、学生が企画作成した広報用ポスターを図 1 に示す。

実施当日の一般参加者は 90 名であった。午前の基調講演は恵小百合氏（江戸川大学名誉教授）が担当したが、その様子（図 2）と内容は基調講演概要にまとめた。また、分科会と意見交換会の様子他（図 3～6）は、4 と 5 の概要にまとめた。当日は、参加者のうち 53 名からアンケートを回収し、その集計結果の一部は、表 1 にまとめた。

投稿日 2020 年 11 月 25 日 受理日 2021 年 1 月 13 日

*所属：教養学部人間環境学科 **所属：現代教養センター



湘南里川づくり フォーラム2020 金目川水系の今後

日時 2020年2月2日(日) 10:00~16:00 9:30 開場
場所 東海大学湘南校舎 13号館2階201教室
定員 200名(事前申込不要・参加無料)

◆小田急線「東海大学前」駅からバスでお越しの場合は、『秦野駅行き』または『下大根団地行き』(神奈中バス約5分)で「東海大学北門」下車すぐ

プログラム	
10:00	開会式(9:30 開場) (13-201教室)
10:10	基調講演「ミズガキ検定(都市アメニティ検定)」 アリの眼、トリの眼、イルカの眼を持つミズガキの眼で金目川検定問題を作り続けよう！ 惠小百合 氏: 江戸川大学名誉教授 前内閣府公益認定等委員会常勤委員
11:20	分科会Ⅰ: 川の水温が上がったらどうなるの? (13-202教室) 分科会Ⅱ: 子どもが遊べる川づくり (13-204教室) 分科会Ⅲ: 里川づくりと若者世代(大学生自主企画) (13-203教室)
11:20	特別企画 里遊び体験 10号館前Sプラザ
12:50	昼休憩(8号館学生食堂利用可) ポスターセッション(13-201教室)
14:00	分科会成果報告会 (13-201教室)
14:30	全体意見交換会 (13-201教室)
16:00	閉会式 (13-201教室)



主催: 湘南里川づくりみんなの会(流域環境保全活動団体・個人・教育機関・企業・平塚市・秦野市・伊勢原市・神奈川県)
問合せ先: 湘南里川づくりみんなの会事務局(神奈川県湘南地域県政総合センター企画調整部企画調整課)
 〒254-0078 平塚市西八幡1-9-1 TEL(ダイヤルイン)0463-22-9186 FAX0463-23-0599
共催: NPO法人東海大学地域環境ネットワーク・東海大学教養学部

図1. 学生が作成した広報用ポスター

3. 基調講演概要

講師：恵小百合（江戸川大学 名誉教授）

テーマ：ミズガキ検定（都市アメニティ検定）アリの眼、トリの眼、イルカの眼を持つミズガキの眼で金目川検定問題をつくり続けよう



図 2. 基調講演の様子

恵先生は江戸川大学の名誉教授であり、NPO法人荒川流域ネットワーク前代表、社団法人ナショナルトラスト東海元理事事務局長、公益財団法人神奈川ドラスト緑財団元理事、東洋大学工学部建築学科、東京大学大学院工学系研究科建築環境工学専攻といった経歴をお持ち、財団法人政策科学研究所で環境、行政、市民活動、ナショナルトラスト運動等を12年間研究し、江戸川大学で22年間都市アメニティ論等を講義ののち、内閣府公益認定等委員会委員としても6年間活動されている。

【概要】

講演では、水辺に集まる子供をミズガキとして、自分たちが知る金目川流域の特徴を検定問題といった形で伝えると共にミズガキを育成していく趣旨として、どのような環境であれば川に人が集まるか、どのようにすれば川の良さが伝わるか等検定問題をつくっていく際の視点や考えについてとご自身の荒川流域ネットワークでの経験談について中心にお話いただきました。

アリの眼、トリの眼、イルカの眼で環境を見る眼とは何でしょうか。恵先生はそのような問いを検定問題の材料として提唱しつつ、持論としてアリの眼は身の回りの土壌に微生物の棲息や保水能力、植生を維持する力が備わっているかといったミクロな視点を挙げ、トリの眼においては川のみならず流域全体の環境を対象とした視点、イルカの眼においては川の最終的な到達点である海から流れてきた水の水質などに向けた視点をそれぞれにおいての例として挙げられました。

また、ミズガキを水辺に呼び込む環境についての例としてサンゴ礁、オオタカ、アユを例に挙げられました。荒川では、先生が活動していた当時東京湾へと流出する砂が少なく、干潟が減少することによって生物の減少が起きていたが、反対に沖縄では、肥料等を添加した砂が陸から大量に流出するため富栄養化が起き、サンゴの棲息に影響を及ぼしているといった声が上がったとおっしゃられました。オオタカについては、先生がおられた大学のある千葉県流山市でオオタカが営巣する20haほどの都市林があったが、オオタカが子育てをしていく環境条件として雛の成長度合いにあった餌生物が周辺に棲息している事が必要であるといった話をされ、アユでは回遊する生活史と共にそれを支える環境が必要であるといった例を挙げられていました。これらの例からミズ

ガキにおいても、ザリガニ等を例として彼らが欲する条件が整っている必要があると論じておられ、それら条件が整う因子についても検定問題としての活用へと推しておられました。

日本の川は海外のものと異なり急流であるといった特徴があり、山の稜線に囲まれた内側に雨が降ることによって、それらが集まり一気に押し寄せると川の周辺の環境が乱れて、整備等といった取り組みの成果を台無しにするといったお話をなされていました。金目川流域には盆地や扇状地、河岸段丘、海岸線など様々な地形があり、それらの場所で様々な活動や経験をしてきた人達がムカシミズガキとしてミズガキにそれらの場所での活動の仕方や産業、生活の糧の存在を教えていくことが望まれ、またそれらは一つに決まって、いるわけではないことから時代によって異なる検定ができることも面白いのではないかとおっしゃられていました。加えて、そのような経験や時代といった観点からミズガキ検定、都市アメニティ検定の2つの検定問題の作成を提案しておられ、ミズガキ検定では安全性を確保しつつ物事を観察するといった水辺でのフィールドセンスを育む力、都市アメニティ検定では生活の中での快適性や安全性、保健衛生性等といった物事の知識、原理を考える力が養われると話されていました。そして、それらについて考えると共に、考えを話す事や検定問題化する等共有する課題を設けてそれらが集積していく事によって、川の上流域と都市で貯水のバランスの取れた街づくりが行われることを熱望されていました。

また、題の作成には流域ネットワーク内のみで行う他、イベント時に問題募集を行うなど定期的なものとして新しい課題を見出すための知恵を出し合うといった事も検定問題づくりを展開していく上で提案しておられ、そのようなお話の中で現代にミズガキがない要因として、教育の場で水辺への立ち寄りを抑制する指導がなされていることを挙げておられました。現代においては水辺に立ち入って事故が発生した場合、自己責任となる他整備不良として川の管轄者にも責任が課せられるため立ち入りが禁じられている箇所が増えており、そのような社会風潮から危機意識のみを持つ層の人も増えてきています。そのような課題に対し、恵先生は層に段階を置いて川の魅力や必要性を伝えていくといった事を提唱しておられました。恵先生は川への関心は無関心層、普通層、関心層の3つの層に分けて、無関心層と関心層を約5%ずつ、その間の普通層を約90%といったように割り振っておられ、危機意識のみを持つ人々たちを無関心層に当てはめてそれら人々に川の良さを伝えるために、まず普通層の人々に川の良さを伝えて知ってもらい、普通層の人の言葉で無関心層の人々に伝えてもらう事が有効的であると話しておられました。

このような取り組みをすることの意義としては、不特定多数の人や生物、世代を含めた社会に対して利益となることを還元し、社会を変革していく事にあるとおっしゃられていました。

続いて荒川流域ネットワークにおいて活動していた際の話では、まず荒川で子供たちを遊ばせられないといった問題が挙げられた事から1. 清流をよみがえらせよう、2. あなたの家も水源地、3. 絶滅危惧種ミズガキ復活、4. 「木遣い文化」運動、5. 流域経営と国土保全といった5つのミッションを掲げてミズガキの育成にあたられていました。当時荒川では農業における利水を目的として堰が設置された事でそれまで食料等として生活に密接していたアユが遡上できないといった環境が出来上がっていました。そのような環境の中からミズガキを復活させるための取り組みとして埼玉県立国際環境研究所の金澤光氏による地引き網体験等を例にミズガキの育成に励まれ、そのような現状が教えられてきました。それら取り組みでは関心層や普通層のみならず無関心層に当たるような人々の参加も見られ、体験を通じて関心を引くことが出来、そのようにして育成したミズガキが10年後や15年後には新たに教える側として取り組みを行っていくリーダーとなっていくと話しておられました。

また、堰への魚道の設置によってアユが遡上できないといった問題の直接的な解決にも取り組みが行われ、様々な種類の魚道の設置と共に、その効果を測定し、調査結果としてまとめられてきました。

まとめとして、室川や葛葉川をはじめとした金目川流域は階段等が整備されてアクセスのしやすい箇所や取水堰、堰によって堰き止められている箇所、水田地帯を貫いている箇所等教育の場として恵まれた箇所を豊富に有しているため、それらをミズガキの育成に活用していく事が望ましいと述べておられました。

4. 分科会概要

分科会Ⅰ「川の水温が上がったらどうなるの？」

担当コーディネーター：柳川三郎氏 金目川水系流域ネットワーク代表世話人



図3. 分科会Ⅰの様子

－議論された内容－

柳川氏からの問題提起

地球温暖化の影響で気温が上昇している。河川や海洋の水温も上昇しているようだ。金目川ネットワークでは2005年から真夏の一番暑い日の一番暑い時間帯に金目川水系の河川の水温を測定している。上流よりも下流の水温が高かった。2005年を基準(100)にすると2013年までは100を超える事が多かったが2014年以降は100を下回ることもあった。この現象の原因は分かっていない。2015年以降気温も測定するようになった。地点ごとのデータを比べると気温と水溫の相関が出ているようだがデータ量が少ないため、今後のデータ蓄積に期待したい。これからも地球温暖化が進んだ場合、金目川の生態系はどうなるか考えていきたい。

<水溫の変化について>

□海水温については気象庁がよく調べている。しかし、河川の水溫の調査は広く行われていないため民間の調査データは貴重である。

□アユは生きられる限界は水溫25℃。しかし、金目川では25℃以上の区域がこの10年で増えている。

- ☐河川温度調査では下流は30℃くらいの年が多くなっている。
- ☐河川調査のついでに海水温も測っている。海水温は29℃だった。1か月後に台風が来たが相模湾に近づいても勢力が衰えなかった。水温が高いせいではないか。
- ☐台風第19号では観音橋の直ぐ下まで水が来ていた。5,400人が避難したようなことはこれまでなかった。
- ☐2014年以降の水温の低下は下水道の整備が進み、家庭排水の影響が減少したためではないか。
- ☐水温は雨の温度にほぼ依存する。地下水については、地下の温度は深くなるほど温度が高くなるため地下水が地下をどのように通って来たかによる。そのためある地点の温度は気温との相関が高くなる。
- ☐下水処理場からの排水は、水質は確保されているが水温を冷ましてから放出することはできない。農業用水も同じで流入すると水温が高くなる。

<魚について>

- ☐釣りをしていると水温が朝と昼とで違っているのがわかる。水温が変わると魚の動きが変わる。前の日が雨だと水温が低く、浅い場所だと水温が高くなる。
- ☐海では潮の満ち干で水温が変わる。1日のうちでも2℃くらい違っている。
- ☐水温が変わると釣りへの影響が大きい。水温が4℃下がると魚の活性が変わるのがわかる。
- ☐今泉蛸橋では魚が多いが湧水の影響があるのでは？河床を綺麗にしたせいもある。コイがいなくなった。
- ☐弘法橋まではアユが上がってくるがそれより上にはアユはおらずアブラハヤが住んでいる。
- ☐台風の時は、魚は田圃に逃げ込む。昔はそれを狙って魚を捕り、良いタンパク質として味わった。
- ☐板戸川ではアユが獲れるようになった。魚道を変えたためではないか。

<鳥について>

- ☐金目川下流の高麗山付近でオオタカが狩りをするのが目撃される。また幼鳥が見られるので繁殖している証拠。オオタカがいるということは生態系が豊かだということを意味している。また水質が汚くても生息できるハシビロガンが見られなくなった。一方でヤマセミがいなくなっている。
- ☐下流部では土手の草が刈られて丸裸になった。オオタカが来なくなるのでは。一方で草原性のヒバリは増えるかも。
- ☐カラスが高麗山をねぐらに使っている。しかし、7～8年前から減って来ている。
- ☐河川での鳥は魚が増えないと増えない。最近、鳥が増えているので魚が増えている証拠ではないか。
- ☐長いスパンで考えないと分からないのではないか。

<気候変動について>

- ☐最近気候変動の影響が台風の被害が激甚化している。しかし、台風が来た後3日で魚が戻って来た。生き物の生命力、自然というものはすごいものだ。
- ☐地形はどうやってできたか、雨で削られてできたものだ。平野は本来そういう場所。過去の災害で護岸やダムが造られてきた。自分の住んでいるところはどんなところか把握しておくべき。危ないところはハザードマップに出ている。しかし、ハザードマップには時間軸が無い。

<まとめ>

- ☐ 私たちがなすべきことは川を綺麗にすること。行政ができることと私たちができることは違う。自分たちができることは限られているが出来ることをやっていくのしかない。昔は金目川でタニシが獲れた。そのような川にしていけるのが私たちの目標ではないか。

分科会Ⅱ「子供が遊べる川づくり」

○担当コーディネーター：上田 秀一（湘南里川づくりみんなの会幹事）



図4. 分科会Ⅱの様子

（分科会の開設背景）

参加者の理解をそろえる目的で、湘南里川づくりみんなの会が“子どもが学び・遊べる川づくり”を目指すのは、これがこれからの世代につないでいく金目川水系の姿と考えていることを説明。今まで行われてきた生き物観察会も子どもが遊びながら楽しんでいることが成果として評価されているので、観察会も遊びの範疇とみなした。

遊びの意味について、動物にとって身体も鍛え、脳（思考や感情制御など）も鍛える本能的活動（生きる上で不可欠なもの）との最近の研究成果を説明した。

（昔の川遊びの紹介）

- ①天竜川で遊びシジミを捕り、泳ぎもした。金目川では最近川で遊んでいるのをあまり見ない。
 - ②東京四谷辺りではザリガニを捕り、この身でウシガエルを捕って神楽坂で売った。
 - ③むかし川で遊んだ人が多かった。今は子供を連れて川で遊んでいる人は数名見た。
 - ④福島では大雨が降ると魚は浅いところに避難して来るのでこれを取った。これがおかずになり親に喜ばれた。
- （恵先生） こういう魚取りをアソビシゴトという。遊び仕事は誇りだった。

（今の川遊びや生き物観察会などの紹介）

議論する川遊びの場所は金目川（水系）、参加者は小3以下を想定して、川遊びのイベントをどのように開催するか、子どもの集め方、川遊びの内容と用意するもの、課題その他などについて意見を出し合う。

- ①秦野市によるエコスクールが紹介された。地域の環境を守って育てようという狙いで2007年から小学校（総合学習）・幼稚園を対象に。フィールド編はくずはの家えのきの会が担当している。水関係で7回実施、1, 430名参加。スタッフは210名。事前にどんな生き物が捕れるか調べている。市から補助金が支払われている。
- ②くずはの家辺りでタヌキの疥癬（カイセン）を見たことがある。自動車学校のところには数匹いる。人に移る

心配があるのではない。どう対処するのか。(この答えとして) 自然界でうつる可能性は小さいと考えている。市は捕まえて持って行けば対応する。

③洪田川で定期的に調査や生き物観察している。河川工事が始まるためこれからしばらくは川に入れなくなった。子どもを川に近づけたい。川にどう手を加えたらいいのか?に興味がある。川に行けなくさせているのは、川床がぬかるんでいて大人でも滑って転ぶので危ない、行けない。聞き取り調査をしたら、今の子どもは川で遊んでいないと判明。

④秦野の西小、堀川小の依頼を受けて四十八瀬自然村は3 & 5年生の授業として各学年年3回コメ作り／古代米づくりを行っている。作業後汚れた足や手を洗いに四十八瀬川に行き、川遊び(水遊び、生き物捕りが始まる)を楽しんでいる。様子が写真で紹介された。

⑤鶴巻でホテルの幼虫を放流してホテル発生さる活動をしている。子ども(会)とホテルのために田圃(もち米づくり)の共同作業をしている。始めのころは泥にまみれるので田圃に入るのを嫌がったが、今では平気になりどんどん入るようになった。

⑥鶴巻の小学校では生き物観察会を行ってきたが、去年は台風多発で中止にした。今年は学校あるいは校長のやる気にもよるのでどうなるか。また、親もSNSやPCを使う時代に、子どもを川で遊ばせることを簡単に許可するだろうか。子どもとどういう切り口で接するのが良いか難しさを感じている。

⑦くずはの家の川遊びの取組を紹介する。くずは溪谷に来て川に訪れたい、遊びたいというニーズがあるので、川にゴミがないように、安全なように毎日整備・管理している。また、くずはの家が行事を行う場合は前もって危ないものがないように清掃している。

くずはの家はいろいろな世代の興味にこたえようと年齢を考慮した4レベルのプログラムを持つ。川遊び行事は“水鉄砲で遊ぶ”がある。親にも着替えを持ってきてもらって一緒にやる。次のレベルとして月例観察会“川で生き物を観察する会”を開催し水辺分科会が担当している。高校生は行事に参加はしないのでボランティアとして行事の支援をしてもらっている。さらに自然観察員養成講座で勉強してもらって行事を支えてもらっている。

⑧子どもと家族で川に行き川遊びをしているが、子どもはだんだん深いところへ行きたがる。深さがあって流れが急なところは限定されるが、そういうところが面白いので大事にしたい。川下りでは危ない物・障害物(動けなくなるので)がないか注意している。ウチはリスクのある所で遊ばせる。川の遊び方を教え、機会を作っている。(これ以上はダメだというリミットをはっきり示すことが大切。)

⑨大きなイベントに出展するときは、ナマズ、ウナギ、ザリガニを触ってもらって生き物に興味を持ってもらえる。これは有効な方法である。

(これからの川遊びとその実現・実施方法)

①南平橋の辺りでは釣針がたくさんあって危ない、ここでやるなら対策がいる。

②川は危険と隣り合わせの一面がある。みんなにとって遊べる川とするには生き物がいる。そのためには魚道がある。川へのアクセスがある。このように遊びやすい環境が必要である。学校の先生が川遊びを支援するとは限らない。先生による。

③現在は、くずはの家や四十八瀬の行事は学校からの依頼で生徒が参加している。地球っこひろばは所属会員(子どもも親も)が参加するが、学校や公民館の要請イベントもある。参加者募集を考えると、自治会や子供会を含めてこれからも同様に理解者が主催しこれを支援する形になる。

④遊べる川の場合は、危なくない場所を選んで／きれいにしておくので、流域を限定することになる。金目川水系全流域ではない。

⑤ヤマビルがいると子どもは行きたがらなくなる。危険とは思っていないが嫌。

⑥土屋橋でイベントを行うが、ここはコンビニがあり、トイレが使えるので経験が少ない参加者の場合にはよい場所であった。エコスクールは川遊びの経験がない親が多く、まずは安心して川遊びができる場所で回数を積んでいくやり方がよい。

⑦魚網は子どもたちが持っていないので、開催側が用意する必要がある。また、生き物の種類が分かる写真入り資料(フィルムカバー入り)が欲しい。

⑧何度か同じところで開催することによるオーバーユースは、今までのような実績では心配はない。むしろカワウによって魚がいなくなってしまう害の方が大きい。

⑨河原町付近ではブルドーザーで川をしゅんせつする。キャタピラーで川床をつぶすことになり針金とか危険なものが出てくる。片付けられていないが後始末してほしい。

(まとめ)

ー全体ー

今回の分科会は、今までの川遊びの状況を知り、また現状の課題から“こうすれば遊べる川が作れる”という意見が多く発言された。今後、遊べる川づくりを実現させるために貴重な情報を蓄積できた。

ーどのように実現するかー

イベント:

現段階での川で遊べる川づくりは、いつでもどこでも誰でも金目川水系であそべることを目指すものではない。しばらくは川遊びを主とするイベントを限定された場所・流域で開催する。この実績を積んで川遊びする子ども

を増やし、イベントの頻度を増やし、遊べる流域を多くしていく。

開催者：

参加する子ども（&保護者）を集めるためにも学校・幼稚園、先生、公民館の行事、子供会の行事、自治会行事、くずはの家(自然観察施設)などの団体が主催する形を取り、みんなの会は行事を支援する形を取る。

場所の調査・選定：

ゴミが少ない、きれいな流れ、川底に危険物がない、アクセスしやすい、トイレが使える　そういう場所が川で遊べるイベント開催場所として適当。

道具など：

魚捕り網（開催側が用意）、水鉄砲、水ガキ検定のような質問（クイズ）遊び。

前日清掃しておく必要がある。当日は水量など問題がないことの確認が要る。

－実現への課題－

タヌキの疥癬（カイセン）を見たことがある。ヤマビルがいる，“だれが責任を取るのか”などネガティブな情報による反対意見に出会ったらどう対応するか？

恵先生の回答⇒　一緒に詳しい人を探しましょう。調べませんか。など相手の人が活きる道を探すやり方を取る。リスク管理者を作るなども良い。

広報：

“川は危ない・汚い，だから川で遊んではいけない”という一般市民の意識・反対が予想されるので、これに対する説明（資料やパネル）を用意する。相手の意識を翻すことはできなくても興味を持つ人が川遊びに参加する妨げにならないようにする。内容は、特定の場所で大人が見守る川遊びは危なくない・汚くない、川遊びは子どもの成長に必要、金目川遊びは地域の魅力づくりに役立つ、川遊びは環境問題を解決する能力を育てるなど。

地域で活動する市民団体は高齢化の現状があり、なかなか若者世代が参加してきていないという現状がある。そこで私たちはアンケートによる現状調査と、行政や市民団体の方にお話を聞くことにした。双方の意見や思いを集約し、なぜ若者世代と地域の市民団体との距離があるのか、どのようにすればその距離が埋められるのかをアンケートの回答結果から考察した。そこから、対応策や改善策を提案し、議論した。

分科会Ⅲ「里川づくりと若者世代」

○担当コーディネーター：小櫻慶吾・高橋亮太・八代直樹・小川海和・保坂竜世・

手塚大樹・西嶋 純平・米田慎吾（東海大学教養学部人間環境学科学生）



図5．分科会Ⅲの様子

【概要】

私たちは、「近年、里川づくりを含め環境保全活動に対する若者世代の加入が問題となっている」ということに着目した。また、過去に行った里川フォーラムで「学生が提案した企画を、学生自身が継続して活動を行えていない」といった現状を踏まえ、どのようにすれば若者世代が里川づくりにかかわる人数が増えるのかについて考えた。そこで、今回のテーマである若者世代の加入について議論を行うにあたって地域の方々に学生側の現状や考え方などを知ってもらうために3つの問題点を挙げ発表し、その問題点をどう解決するべきかについて議論した。

【学生による発表】

今回の議題である環境保全活動に対する若者世代の加入について考えるため、①学生側の問題点、②学生から見た地域側の問題点、③大学と地域連携に関する問題点、と3つのテーマに分けて発表を行った。

①学生側の問題点では、卒業単位の取得やアルバイト、部活動などにより保全活動に割く時間がないこと、インターネットで里川について調べても里川の定義や活動内容が出てこず、そもそも検索する機会がない為に里川が存在を知れていないこと、他市町村からの通学や、他県からの下宿が多い為、湘南地域に対して愛着が持てていないことなどの問題点が挙げられた。

②学生から見た地域側の問題点では、地域側の広報が少ないことや、高齢世代と学生が利用しているメディア媒体に差が生じていることにより里川や活動に対する認知度がいうこと、どのような活動を行えば「川」から「里川」と呼べるようになるのか分かりにくい為に活動の目的やゴールが見えないことなどの問題点が挙げられた。

③大学と地域連携に関する問題点では、地域から大学に持ち掛けられた要望の内単純労働などに当たるものは対応しておらず、学生の学びに繋がると判断されたものだけが対応されている現状にあるため、地域と大学の意思疎通が十分に行えていないことや大学に地域連携課は存在しているが、2017年に開設されたばかりであるためにその認知度が低いことなどの問題点が挙げられた。

これらの、学生が考えた3つの立場の問題点を共有した後、地域の方々とどのようにすれば若者世代の加入が解決できるのかについて議論した。

【当日行われた議論】

③の問題点に対し、地域と大学の連携に「企業」を巻き込むといった動きにより、大学と共同研究を行っている企業が存在することやインターンなどを導入すれば大学側にもメリットが発生するのではないかといった意見を頂いた。また他大学には、ボランティア活動を行う事で単位を取得できる制度が存在していることが分かった。②に対しては、やはり若者世代が利用しているメディアを通しての広報ができていないため、広報の方法を考え直す必要があるのではないかという意見を頂いた。①に対しては、考え方が他人事なのではないか、学生が自主企画を作成してみることやできる取り組みを見つけて行っていく等してみてもどうかという意見を頂いた。

【まとめ】

今回の議論を通して、学生が提示した問題点に対し地域側の視点での解決策や対応案といった考えが意見として挙げられ、それらの意見から里川づくりを行っていくにあたり、地域と学生において互いの持つ考えが相手にとって不十分となっている、また伝わっていないといった現状が見受けられ、里川づくりへの若者世代の加入を考える新たな視点が得られた。このように地域、学生共に新たな見解が得られたことや学生にとっての考える機会となったことは、長期的ではないが里川づくりにとって有意義なものであったといえるため現状としては、里川フォーラムをはじめとした学生参加の場を今後も継続していく事が重要であるといった結論に至った。

5. 全体意見交換会概要



図6. 全体意見交換会の様子

【分科会2担当者】

皮膚病にかかっているタヌキやヤマヒルが出てきたら危ないのではないかというような意見が出てきたらどうすればよいか、恵先生に教えていただきたい。

【講師】

そういうことを言う人の心境としては、そういうことをして何かあったら誰が責任をとるんだというところがある。そういう人に対しては、「タヌキやヤマヒルのことについて、一緒に勉強しませんか？詳しい人をご存じないですか？一緒に探しませんか？」と活動に巻き込んでいくことも一つの手。

【分科会2担当者】

ありがとうございます。分科会3の発表では大学生と地域の接点がないので、どういう活動をすればいいかわからないということだったが、我々は学生を働き手として期待しているわけではない。ネットで調べるだけでなく、実際にフィールドに出て、川に入って見て触ってみないと、その地域の環境のことはわからないし、関心を持って勉強することは難しいのではないかと。そういう意味では、3年生からではなく、1年生の時から、遊びながらでよいので、活動に参加してもらえたらうれしい。学生が参加してくれると私たちにとってなによりかという、子どもたちが川で遊ぶときに、我々お年寄りだけでなく若いお兄さんたちがいれば、より楽しく川で過ごすことができる。学生にとっても、子供たちとの接することで新しい発見につながるのではないかと。是非、働き手としてでなくてよいので、もっと地域の活動に参加してみてもいいかなと思った。

【講師】

分科会3にも少し参加させていただいた。荒川流域ネットワークでも、ネットが苦手な世代が多かった。学生さんには、画面上の地図に色を付けてもらったり、ネットに情報を出すときにどういうキャッチーな情報をだせば一般の方にも興味を持ってもらえるかを考えてもらったりした。学生や大学の人たちは毎回活動に参加してもらっていたわけではないが、荒川流域ネットワークの大切な仲間。そういう存在やかかわり方もある。地元について詳しい人たちだけが情報源ではない。知っていることを世間に発信する方法を私たちは全然知らない。そういうことをアドバイスしてもらえる点でも、若い人の力が大きい。

【司会】

ありがとうございます。この里川づくりみんなの会は、10年くらい前に湘南里川制度というものから出発した。最初の一年間は毎月1回「自分が子どものころ金目川はこうだった」という議論をしていた。2年目からようやく少しずつ動き始め、3年目に初めてフォーラムを開催した。

フォーラムはもともと関係団体の情報交換の場としてやってきたが、ここ数年様相が変わってきて、こういう風にやっていこうよという提言が出てきて、規模も拡大してきた。

第1回目のフォーラムは35名くらい、それからだんだん増えてきて3回目は70名くらい、近年は100名を超えてきている。

【分科会1担当者】

意見、近年、行政と大学生、市民と一緒にやってやろうというのがどの自治体でも盛んになってきている。ある厚木の大学は、今年度、県に意見具申して予算申請を行い、大学と市民が連携して活動が行われることとなった。

若い人は、世の中を前に進めていける熱い思い・力を持っていると確信しているので、期待している。

私たちが地域の人たちと活動をするときに、大学生の意見がかなり影響する。大学生3年生約25人と毎年生き物観察会を開催しているが、地域の人からの評判がいい。里川づくりでもそういう進展をしていくべきと期待している。平塚市の環境フェアにも参加しているが、大学生が準備や片付けも含めて熱心に取り組んでくれている。

そういうことも含めて、「人」と「人」の輪、「人」をつくっていくということをこの里川づくりでも取り組んでいくべき。大学生には大変期待しているので、ぜひ頑張ってもらいたい。

また、何か事業をしたい時には、私の経験上、書類やデータを緻密に作り上げて議員や行政に提供すると、予算化される。そういう地道な活動が重要。

【参加者】

このフォーラム初めてから十数年たつが、地域連携について東海大学はどう感じているか。

【会長】

当大学の地域連携課は2017年にできた。ようやく動き出したところなので、成果としてはまだまだこれからと考えている。

人間環境学科1997年から、里川をはじめ北海道や沖縄など連携先も増えて成果も上がってきた、そういうことを目指して入学してくる学生は頑張ってもらっている。

ただ、我々が忘れてはいけないのは、進学率が昔と全然異なり、入学してくる生徒の質も昔とは違う。

【司会】

ありがとうございます。学生に期待されることは大きいですが、里川づくりはみんな一丸となって活動することが大事。みなさんいろいろ活動していると思うが、ビジョンに立ち返って、ビジョンを達成するにはどうすればよいか、考えないといけない。学生さんは、学生のよいところをどういかしていけるか、我々も強みをどういかしていけるか、考えながら継続していくことが大事だと思う。

学生の分科会で、「この活動になんのメリットがあるんですか」という質問があった。我々の活動はお金为目的ではなく、この金目川という財産を次世代に残すことが大事。残せたときに、それが財産になる。これがメリットではないか。

現場のことを調べている人も入れば、学問的なことをやっている人、個人会員で見守りウォーキングしているひともある。いいところを結集して、新しい里川づくりを作っていくことが必要でないかと考えている。学生に

期待をするのはいいが、それぞれの活動を止まってはいけない。

【参加者】

先ほど昼休みに、別の参加者の方から大変面白いお話を聞いたのでご紹介したい。

子どもたちにとって今の時代は、いもりの構造を勉強して、どうやったら水陸両用車を作れるか、テントウムシから空飛ぶ自動車を作るためのヒントを学ぶ時代なのではないかという話を聞いたので、ご紹介したい。

【参加者】

マイクを渡されたので補足という形でお話する。今の子供たちは自然で遊ぶ体験が乏しくて、そういう子供たちが大人になった時に、今ここに居る皆さんが少年時代に体験したような原体験を感じるのは難しいし、こういった活動にときめく機会も少ないのではないかと考えている。年代の齟齬、視点の違いがあるが、そういう人たちをどう巻き込んでいくか。自然を守ろうとか、原体験とかでは動かないと思う。今の時代、どんなものにも経済が含まれるので、ある程度大義名分というか、こじつけが必要でないか。生物工学のような話をしたが、生物層の豊かさがそのまま発見の豊かさにつながっている。

大義名分として、「里川を守ることは、生物層を守ること、人類が未来を生き抜くことを学ぶきっかけになる」というように考えられるのでは。

このように考えることで、わかりやすいというか若い人と年配の人をつなぐ橋渡しになるのではないか。

自分もそうだったが、昔は川で遊ぶのは面白くないと感じていた。面白いと感じるようになったのは、ある程度大人になって時間に余裕ができてから。

今の子供たちは親とそういう体験をできているのか。そもそも今の親たちも都会化して自然にふれていない。30～40代同世代の友人も4、5センチのアブラハヤを見て「これはメダカ？」と聞いてきた。それくらい今の親たちは自然体験に乏しい。

金目川は神奈川県内では比較的 naturally 恵まれていると思う。そういった環境の中で、子どもと親も巻き込んで、自然に触れ合う機会は重要。それだけでは行政は動けないので、大義名分は必要ではないかと考えている。

【司会】

ありがとうございます。分科会2の担当者からなにか意見あるか。

【分科会2 担当者】

大義名分が必要ということについては、相違ない。新しい時代を作っていくという視点は、若い人たちには必要だと考えるが、その新しい視点は、我々年配の人が視点そのものを見せることじゃないと考えている。我々ができるのは、私が理解出来ていることを見せてあげるだけ。その過程のなかで、若い人たちが将来やりたいことを見つけ、それが大義名分になっていくのではないか。一緒になって議論や参加していくのはもちろんウェルカムなので、答えになっていないかもしれないが、そういうようにして一緒に活動していきたいと考えている。

【分科会1】

金目川は、くずはの家というフィールドをもっているのだから、もっと活用していくとよいのではないか

【参加者】

くずはの家主催のいきもの観察会は、年一回しかできない状況。ほかの団体に活用してもらうのは良いと思う。

【司会】

くずはの家にミズガキはいるのか

【参加者】

ミズガキもムカシミズガキもいる。思うところがあり、里川としての意見交換の場が、フォーラムのように頭でっかちになってしまっている。なので、意見交換ではなく、みんなでとりあえず何かをやってみるのはどうか。クリーンキャンペーン、生き物観察会などもまだまだ未開の地がある。そういう具体的な活動を地域の力を借りながらやっていきたい。団体の中の「個人」と「個人」が交流することで、いろいろな活動の方向が見えてくる。とりあえずやってみて、難しかったらやめるとか。

この場で、来年はフォーラムという形でなく、生き物観察会でなど決められたら、進んでいけるのかなと思う。

【参加者（学生）】

こういう話を学生が我々8人しか聞けていないのはもったいない。今は冬季休暇に入ってしまった。入試

等も重なっているのでは、立ち入りできない号館もある。開催時期を授業期間の日曜日にするなど、学生が参加しやすい時期に開催できないか。

【会長】

前は1月末に開催していたが、卒業審査・修士審査などの関係で後ろ倒しになった経緯がある。もしやるとしたら、思い切って年内にやるか、正月明け早々にやるか。学生でも積極的に活動している人はこの時期でも活動しているが、校舎が使えないので、公民館などを借りて活動している。開催時期については、役員会で検討したほうがいいかもしれない。

【参加者（学生）】

大学生の参加は急務だと思っている。さっきも発言があったが、今日のこの議論を聞いているのが学生は8名しかいない。しかも、こういう活動に参加する必要性を我々は半分わかっている状態。先生が言っていた熱心な学生に入るかわからないが、個人的には猟友会に所属し、有害鳥獣の駆除など参加している。そういった活動に参加していない普通の学生にどう発信していくか。みなさん熱心に活動されているが、それが全然効果的に発信されていない。自然環境課程の別の研究室でも、今日フォーラムをやっているのを知らなかった。

みなさんが発信している媒体と我々が受け取る媒体が違うのでどれだけ発信しても、届いていないものもある。まずは活動から、形から入っていったら、そこから地域愛とか、守っていかなければいけない財産とかに、気づいていくことができればいいと感じた。

【参加者】

ライン（LINE）など使ってみてはどうか。

【司会】

ラインというご意見をいただいたが、情報発信の部分は確かに考えないといけない。現在は会報を作成するなど、情報発信については力をいれているところ。準会員のようなものを作って、会費を安くして気軽に入会できるようにしたうえで、ライン等で情報発信していける仕組みをつくっていくのもいいかもしれない。日程の件とラインの件については、役員会で検討する。

【参加者】

里川づくりの実情として、マンパワー・財政的にだいぶ厳しい状況。会員の交流会なども開催しているが、参加者もなかなか振るわない。しかし、里川としてやらなければならないこと・期待されていることはたくさんある。昨年度の台風の時も、市と協力してごみ処理など行った。しかし、県の土木事務所に話をしに行っても、「もう今年度の予算がないので来年にしてくれ」と言われる。このような状況で、じゃあどうするかということが我々里川づくりに問われている。

会費の徴収・団体からの賛助金を増やす・自治体からの補助金など、財政的にも各所に働きかけていく段階にきている。

会報・見守りウォーキング・川づくり（環境づくり、金目川流域懇談会）の3つの柱に力をいれて、フォーラムを休みにしてもいいので、丁寧に取り組んでいきたいと考えている。

【学生】

自分は東海大学1年生。今日いるほかの学生はみんな3年生の先輩なので、1年生は自分だけ。フォーラムにはNPOの活動の一環として参加した。里川づくりの広報について意見がある。自分の実家は福岡で、現在一人暮らし。学生は時間がないというものもあるが、地元を離れ一人で生活するとなった時に、地域の活動に一人で参加するのは難しいのではないと思う。地域のこともよくわからないし、なによりも自分のことで精一杯。ただ、逆に言うと、なにも予定が決まっていない。慣れてきて、授業の勝手がわかってきた段階で、バイトなど自分の予定をだんだん空いている時間に入れていくと思う。なので、4月や5月など、まだ学生の予定が埋まっていない時期にイベントを集中させることで、学生が参加させることができれば、里川の活動が、学生生活4年間の日常になる可能性もあるのではないと思った。

情熱をもって活動している人達は、広報活動をしなくても参加してくれる。そういう人たちだけでなく、ちょっと興味を持っているくらいの人たちを巻き込んでいく、少しでも巻き込めるように、4、5月に一度何か企画をしてみてもどうか。

【司会】

学生から意見がでるのがいい。

私たちは「子どもたち」に焦点をあてて活動しているが、その子どもたちが危機的状況にある。自治体も本腰を入れて取り組んでいるし、子供たちにフォーカスを当てて活動している団体もある。学校でも、実際に川で遊べるような機会があれば子どもたちを参加させたいと考えている教員もいる。地域と小中高学校の連携はかなりあるので、大学生の方々にはそれらを上手くまとめてもらえると良いなと考えている。

【参加者】

今まで里川づくりの話となると、川をきれいにしましょうという方向の話になっていて、自然災害のことはあまり議論されてこなかった。しかし、今までか金目川で今まで大きな災害に遭わずに生活できていたのは、運がよかっただけ。昨年の台風では平塚だけでも5,000人避難があって、相当の恐怖心が皆さんあったと思う。今後は「豊かな自然」だけではなくて、「自然災害」という部分も取り入れながら、議論できる場を設けることで、違った視点をもった団体の方々との交流もできるのではないかなと思います意見を述べさせていただきました。

【講師】

自分たちで企画書を書いて、県に提出して予算をとるという、それくらいのことができるチームになっていけると良い。寄付や企業からの賛同を募ったりするだけでなく、自分たちで予算をとっていくという方法もある。

【参加者】

かながわ環境教室というものがあり、市民の立場でいろいろと頑張っている。予算が3万円つき、対象は小学校の生徒。先ほど話のあった、葛葉川の生き物観察会を進めるために、是非、具現化していきたいと考えている。

【会長】

役員会を経なくとも、メールで皆さんに確認していただければよい。フォーラムは毎年開催しているが、会の活動はフォーラムだけでなく、会報やイベント出展などいろいろ動いている。ただ、人的資源が不足しているのは事実。これからもみなさまのお力をお借りしたいと思っているので、よろしくお願いしたい。

成果の公表

「湘南里川フォーラム2020」の実施そのものが成果の発表の場であるが、その他に神奈川県ホームページ内に、「湘南里川づくりみんなの会」のホームページが開設されている。＜

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ph7/cnt/f219/satokawa/top.html>＞

謝辞

この教育研究の一部は、2019年度の教育研究補助金により実施された。関係各位並びに参加学生に、感謝申し上げます。

表1. 「湘南里川づくりフォーラム2020」アンケート結果

(アンケート回答者：53名)

住まい	区分	回答数	%
	平塚市	19	36
	秦野市	18	34
	伊勢原市	3	5
	その他	11	21
	無回答	2	4

性別	区分	回答数	%
	男性	39	73
	女性	12	23
	無回答	2	4

年代	区分	回答数	%
	10代未満	1	2
	10代	2	4
	20代	3	6
	30代	2	4
	40代	7	13
	50代	7	13
	60代	5	9
	70代	24	45
	無回答	2	4

今回のイベントを何で知ったか？（複数回答可）

選択肢	回答数
公民館掲示のポスター、チラシ	11
知人や家族のお誘い	12
県のたより	3
市の広報誌	8
その他	25

今回のフォーラムに参加した理由（複数回答可）

選択肢	回答数
「湘南里川づくりに興味をもったから	14
地域の自然や環境に興味があったから	29
知人や家族に誘われて	8
開催場所が参加しやすい場所だったら	13
湘南里川ホームページ	1
その他	16

今回のフォーラムの感想		印象に残ったものは？（複数回答可）	
選択肢	回答数	選択肢	回答数
よかった	31	基調講演	31
ふつう	7	意見交換会	2
よくなかった	1	分科会Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	9
<感想> ・基調講演が良かった。特にミズガキ検定によるメリット・有効性など		里遊び体験	1
		ポスター展示	0

・大学のプログラムで環境について学んでおり、地元 NPO の取り組みについて伺いたいと考えていた。実際に様々なことを伺えて良かった。

・地域で活動されている方々を知ることができた。

・学生との関わりが持ててよかった。

・今まで関わることのない分野だったので学びが多かった。

・金目川を大切にしようと思いました。

・ミズガキとは自分が川のことをよく見て調べること。ミズガキ環境問題絶滅危惧種を守るミズガキ復活。今生きている私達がやるべき 30 年後の地球を守る。

・荒川の対策含め金目川はどのように保全、利用するのか。ミズガキ検定の推進を行っていくことが必要だと思った。今後の活動として参加者は金目川水系について理解があり、知識を持っている人なのでそうでない人をいかに参加させるか、具体的にどのような活動をするから話し合う必要があると思う。

・一般常識的な講義であった。話し方が下手。荒川流域と金目川流域の規模に違いがあり、参考にならなかった。

・主に「金目川水系」の話だと思っていたが、荒川の話し方多かった。

・自分もあまり川で遊ばないので今回のフォーラムに参加して川で遊びたいと思いました。

・金目川の水や魚に関心があります。

・基調講演の内容や、参加者の取り組みがしれて良かった。

・自分はこの地域のことについて知らなく想像しにくかったが、これからは勉強していつて協力していきたい。

・基調講演が興味深かったです。

・情報資源の発掘と活用と連携を目的とした検定業務に視点を置いた考え方に脱帽です。

・里川の大切さがよくわかった。

・視点が広い。総合的であることなど。

ミズガキ検定の話が今後のヒントになりました。

・ミズガキのお話は楽しく学ぶことができました。人間もケモノを植物も手を繋ぎ生きることを考えさせられた。ヒト中心の社会を脱却する時代を構築し未来へ繋ぎたい。

・新しい地域連携活動情報を得ることが出来た。

・分科会 I に参加した。有識者から多くおられ、知識が広がった。

・基調講演が良かったです。

・皆様の里川づくりに対する思いを直で感じられました。

・様々な人の考え方を知ることができた。

・子供が安全に遊べる川をつくる為のヒントになりました。

・恵先生のお話がよかった。里川づくりも 1 歩進めたような気がします。

・ミズガキ、ムカシミズガキの中間に、川に無関心な若者がいる。子供の親が無関心なのは川の魅力を伝えるのは難しいのではないだろうか

<特に印象に残ったものは？>

・具体的に活動をされてきた方の話は大変参考になります

・里遊び体験で、ノコギリクワガタの幼虫をいただいてよかった。大切に育てます。都市アメニティの考え、人の生活だけ考えるのではなく自然との付き合いで共生していく。

・ミズガキ検定がこれから大事になっていくと思ったから。

・「子供が遊べる川づくり」の為の考え方や方向性を模索しているときに、タイムリーな話が聞けた

・私達の生活に大きく関わっている内容で楽しかった。

・学生の時間感覚、情報を得る方法が分かり良かった。

・色々な視点からの取り組み、考え、意見が聞けて興味深かった。

・子どもが川で遊べる環境を作ろうとしても平塚土木事務所の管理課では難しい

<みんなの会に期待するものは？>

・平塚、秦野、伊勢原エリアの豊かな自然を保全していく活動

・食に訴える活動。採集して、食う！

・もっと子供も遊べる川にしてほしいです

・情報発信

・もっと若者が参加していく活動が増えていけばいいと思った。

・ミズガキをつくる為、川遊びの実践

・力を合わせて川をきれいにすることはとても良い事だと思います。

・子どもたちが参加する活動で川を知らない親世代お先に学び合うことを考え企画するのがキーポイントかと

・楽しく活動できると良いと思います

・川のゴミ清掃や、農家が流す農薬の調査

・多くの県民が川に関心を持ってもらう活動を、みんなの会がひとつになって行うこと

<その他意見や感想など>

・今後とも宜しくお願いします

・続けて行ってください

・河川に溜まった土砂の撤去をお願いします

・今の金目川はすごくきれいになった。私の子どもころの魚も多く見えるようになった。又、川で遊べるようになったらいいと思います。

・ミズガキ復活

・世代間の情報共有が重要だと感じた

・私が低学年の頃はワルガキあった為、生物のことを考えてなかった。

・川の大切さと川を綺麗にすることの大切さを学んだ。データを取り行政と一体となって実施することをが大切だと感じた。川の生態系変化を考慮して実施行動をした。

・何で子どもたちに遊んでほしいの？何を伝えたいの？

・蛍のいる川、タナゴが棲める環境を取り戻せると良いと思います。

・個人でも参加できる活動があれば積極的に参加したい。県のたよりなどに提示して下さると助かります。

引用文献

- 1) ESD-J 特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議
http://www.esd-j.org/
- 2) 環境省総合環境政策局環境教育推進室, 環境教育・環境学習, 環境保全活動
http://www.env.go.jp/policy/edu/
- 3) 東海大学環境憲章 <http://www.u-tokai.ac.jp/ems/kankyokensyo.htm>
- 4) 藤野裕弘・内田晴久 他:「企業のCSR活動と連携した実践系授業の展開(1)ーCSRと大学院授業との連携ー」, 2010年度日本環境教育学会第21回大会研究発表要旨集, pp. 156 (2010).
- 5) 藤野裕弘:「地域社会と連携した体験型環境教育の試みー東海大学の実践例ー」, 私立大学環境保全協議会会誌, 第15号, 19-24 (2012).
- 6) 日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育委員会21期提言:「高等教育における環境教育の充実に向けて」, 2011年9月22日.
- 7) 室田憲一・藤野裕弘 他: NPOと連携した体験学習型教育の試み, 2003年度日本環境学会第29回研究発表会講演要旨集, pp. 178-180 (2003).
- 8) 室田憲一・藤野裕弘 他: NPOと連携した体験学習型教育の試み, 東海大学紀要教養学部, 第34輯, 331-333 (2003).
- 9) NPO法人自然塾丹沢ドン会編集: 名古屋の自然ー丹沢の雑木林・棚田の復権と生き物たち, 夢工房, 神奈川, pp. 63 (2003).
- 10) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験学習型環境教育の試み(1), 2004年度日本環境学会第30回研究発表会講演要旨集, pp. 84-85 (2004).
- 11) 室田憲一・藤野裕弘 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(1), 東海大学紀要教養学部, 第35輯, 271-276 (2004).
- 12) 室田憲一・藤野裕弘 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(2), 2005年度日本環境学会第31回研究発表会講演要旨集, pp. 240-243 (2005).
- 13) 室田憲一・藤吉正明 他: 環境NPOと連携した体験学習型教育の試みー農業体験事例報告ー, 東海大学紀要教養学部, 第36輯, 1-11 (2005).
- 14) 北野忠・藤野裕弘 他: 地域社会と連携した体験型環境教育の試みーSPPを利用した具体的取り組み例ー, 東海大学紀要教養学部, 第36輯, 13-21 (2005).
- 15) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(2), 東海大学紀要教養学部, 第36輯, 249-255 (2005).
- 16) 北野忠・藤野裕弘 他: 地域社会と連携した体験型環境教育の試みーSPPを利用した具体的取り組み例ー, 2006年度日本環境教育学会第17回研究発表会講演要旨集, pp. 146 (2006).
- 17) 藤野裕弘・藤吉正明 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(3), 東海大学紀要教養学部, 第37輯, 247-252 (2006).
- 18) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(1)ー乗船体験実習ー, 2007年度日本環境教育学会第18回大会研究発表要旨集, pp. 65 (2007).
- 19) 室田憲一・藤吉正明 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(2)ー農業体験実習ー, 2007年度日本環境教育学会第18回大会研究発表要旨集, pp. 66 (2007).
- 20) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(4), 東海大学紀要教養学部, 第38輯, 271-278 (2007).
- 21) 内田晴久・藤野裕弘 他: 地域社会と連携した体験型環境教育の試み(1)ー初等中等教育との連携を中心にー, 東海大学紀要教養学部, 第38輯, 279-285 (2007).
- 22) 藤野裕弘・内田晴久 他: 環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み(5), 東海大学紀要教養学部, 第39輯,

289-294 (2008).

- 23) 内田晴久・藤野裕弘 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み（2）～初等中等教育との連携を中心に～、東海大学紀要教養学部、第39輯、295-301 (2008).
- 24) 藤野裕弘・内田晴久 他：環境NPOと連携した体験実習型環境教育の試み（6）、東海大学紀要教養学部、第40輯、365-370 (2009).
- 25) 内田晴久・藤野裕弘 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み（3）～初等中等教育（SSH）との連携を中心に～、東海大学紀要教養学部、第40輯、371-377 (2009).
- 26) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（1）～、東海大学紀要教養学部、第41輯、309-313 (2010).
- 27) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（1）～、東海大学紀要教養学部、第41輯、315-328 (2010).
- 28) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（2）～、東海大学紀要教養学部、第42輯、297-304 (2011).
- 29) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（2）～、東海大学紀要教養学部、第42輯、305-312 (2011).
- 30) 藤野裕弘・青木靖 他：企業のCSR活動と連携した実践系授業の展開（ISO14001の活用）、東海大学紀要教養学部、第43輯、15-22 (2012).
- 31) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（3）～、東海大学紀要教養学部、第43輯、329-339 (2012).
- 32) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（3）～、東海大学紀要教養学部、第43輯、341-349 (2012).
- 33) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（4）～、東海大学紀要教養学部、第44輯、269-278 (2013).
- 34) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（4）～、東海大学紀要教養学部、第44輯、279-284 (2013).
- 35) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（5）～、東海大学紀要教養学部、第45輯、355-367 (2014).
- 36) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（5）～、東海大学紀要教養学部、第45輯、369-372 (2014).
- 37) 北野忠・小栗和也 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（6）～、東海大学紀要教養学部、第46輯、237-242 (2015).
- 38) 岩本泰・藤野裕弘 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（6）～、東海大学紀要教養学部、第46輯、227-235 (2015).
- 39) 藤野裕弘・岩本泰 他：大学と地域が連携したスタディ・ツアーの検討、東海大学紀要教養学部、第46輯、243-252 (2015).
- 40) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（7）～、東海大学紀要教養学部、第47輯、311-314 (2016).
- 41) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（7）～、東海大学紀要教養学部、第47輯、315-328 (2016).
- 42) 藤野裕弘・日比慶久 他：大学と地域が連携したスタディ・ツアーの検討、東海大学紀要教養学部、第47輯、329-337 (2016).
- 43) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（8）～、東海大学紀要教養学部、第48輯、303-315 (2017).
- 44) 藤野裕弘・日比慶久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（8）～、東海大学紀要教養学部、第48輯、316-328 (2017).

- ～、東海大学紀要教養学部、第48輯、317-323（2017）。
- 45) 藤野裕弘・日比慶久 他：大学と地域が連携したスタディ・ツアーの検討、東海大学紀要教養学部、第48輯、325-334（2017）。
- 46) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（9）～、東海大学紀要教養学部、第49輯、341-352（2018）。
- 47) 藤野裕弘・日比慶久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（9）～、東海大学紀要教養学部、第49輯、353-358（2018）。
- 48) 藤野裕弘・日比慶久 他：大学と地域が連携したスタディ・ツアーの検討：2017年度概要～知床試行演習：世界自然遺産を活用した実践的環境教育プログラムの構築に向けて、東海大学紀要教養学部、第49輯、359-376（2018）。
- 49) 藤野裕弘・内田晴久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～環境NPOとの連携を中心に（10）～、東海大学紀要教養学部、第50輯、283-289（2019）。
- 50) 藤野裕弘・日比慶久 他：地域社会と連携した体験型環境教育の試み～初等中等教育と連携した人材育成を中心に（10）～、東海大学紀要教養学部、第50輯、291-297（2019）。
- 51) 藤野裕弘・日比慶久 他：大学と地域が連携したスタディ・ツアーの検討：2018年度概要～知床試行演習：世界自然遺産を活用した実践的環境教育プログラムの構築に向けて、東海大学紀要教養学部、第50輯、299-317（2019）。
- 52) 藤野裕弘・二宮洋 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト～ふるさとの川を次世代に継承する：2012年度概要～、東海大学紀要教養学部、第44輯、285-295（2013）。
- 53) 藤野裕弘・二宮洋 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト～ふるさとの川を次世代に継承する：2013年度概要～、東海大学紀要教養学部、第45輯、373-387（2014）。
- 53) 藤野裕弘・室田憲一：湘南里川づくり地域共生プロジェクト：2014年度概要～流域活動団体連携コース：金目川水系が目指す里川らしさ～、東海大学紀要教養学部、第46輯、275-287（2015）。
- 54) 藤野裕弘・落合由紀子 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト：2015年度概要～流域活動団体連携コース：金目川水系の今後～、東海大学紀要教養学部、第47輯、351-373（2016）。
- 55) 藤吉正明・高木俊之 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト～流域遊休地活性化コース：藍植物の栽培と染色～、東海大学紀要教養学部、第47輯、375-379（2016）。
- 56) 藤野裕弘・室田憲一 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト：2016年度概要～流域活動団体連携コース：金目川水系の今後～、東海大学紀要教養学部、第48輯、349-369（2017）。
- 57) 藤吉正明・隈本純 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト～流域遊休地活性化コース：水田での酒米栽培～、東海大学紀要教養学部、第48輯、371-376（2017）。
- 58) 藤野裕弘・室田憲一 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト：2017年度概要～流域活動団体連携コース：金目川水系の今後～、東海大学紀要教養学部、第49輯、407-422（2018）。
- 59) 藤吉正明・隈本純 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト（最終報告）～流域遊休地活性化コース：水田内に生育及び生息する希少動植物の記録～、東海大学紀要教養学部、第49輯、423-428（2018）。
- 60) 藤野裕弘・室田憲一 他：湘南里川づくり地域共生プロジェクト：2018年度概要～流域活動団体連携コース：金目川水系の今後～、東海大学紀要教養学部、第50輯、345-361（2019）。